

有坂 秀世

古代支那語の入聲韻尾  $p, t, k$  は、現代の閩(福州・廈門・汕頭・臺灣等)粵(廣州・客家等)系統の諸方言では未だ保存されてゐるが、山西諸方言・南京方言・揚州方言及び吳方言の大部分(常州・蘇州・上海・寧波等)では聲門閉鎖音に變化し、北京・開封・漢口・四川・長安等の諸方言では全く消失してゐる。かつて藝文誌上に發表された滿田新造博士の論文「中原音韻と南京音」に據ると、古代支那語の入聲韻尾  $p, t, k$  は、元・明頃の北京官話では、既に聲門閉鎖音に變化して居り、その後つひに全く消失するに至つたものであるといふ。(もつとも、滿田博士御自身は「聲門閉鎖音」といふ語を用ひては居られないが、博士の「無尾入聲」と稱せられたものは、實際上聲門閉鎖音で終る形を指してゐること、疑無い。)これは、まことに適當な見解であると思ふ。

然るに、唐朝後半期の吐蕃人がその文字を以て當時の西北支那音を寫した例に於ては、入聲韻尾は常に  $b, r(d), g$  相當の文字で表されてゐる。(舌内入聲の韻尾は、最も普通には  $r$  を以て寫されてゐるが、稍古い資料には  $d$  を以て寫された例も混じてゐる。)そこで、羅常培氏は、この  $b, r(d), g$  を以て、古代の  $p, t, k$  が次第に弱まつて消失して行かうとする過渡状態を示してゐるものと考へ、それから推して、現代諸方言の形への發達の経路を下のやうに考へた。まづ、上古音  $p, t, k$  は、廣州・客家・汕頭・廈門等の方言ではそのまま保存せられ、吳方言では聲門閉鎖音に變じてゐる。然るに、或方言では、中古に於てこの  $p, t, k$  が  $b, d, g$  に變じ、更に  $β, ʁ(r), g$  と弱まり、つひには全く消失するに至つた。官話や西北方言は即ち後者に屬するものである(「唐五代西北方言」68頁)、と。この考に據ると、北京官話の如きは、未だかつて聲門閉鎖音の状態を経過したことが無いといふことになる。従つて、前の滿田博士のお説とは相容れないのである。

ところが、この羅氏説は、それ自身の中に矛盾を含んでゐる。何故なら、羅氏が西北方言の中に數へてゐる所の文水方言や興縣方言は、現今入聲

の韻尾に聲門閉鎖音を持つてゐるからである。これらは、所謂西北方言といふものが系統上成立すると否とを問はず、兎に角官話とはごく近い關係を持つた方言である。のみならず、官話の中でさへも、南京官話は入聲の韻尾にやはり聲門閉鎖音を持つてゐる。これらの状態から考へて見ると、同じ系統に屬する北京官話の如きも、古くはやはり入聲韻尾には聲門閉鎖音を持つてゐたものであり、それが後世消失した結果現今の形になつたものである、と考へる方が一層穩かなやうである。

然らば、唐代の吐蕃人によつて  $b, r(d), g$  と寫された形の正體はどんなものであつたか、といふと、それは、現代の閩・粵系統の方言に保存された入聲韻尾の發音を觀察することによつて、略想像し得る。私自身が觀察したのは、臺灣中部の人の發音であるが、福州や廣東などに於ける發音もこれと大差無いことは、Karlgren 氏の記載から推して、大體想像される所である。ところで、入聲は短促だといふから、國語の促音のやうに  $p$  と促るのかと思つてゐたら、大いに豫期に相違してゐた。例へば、 $kip$  (急)、 $kat$  (葛)、 $kok$  (各)に於て、 $p, t, k$  と中心母音との結合状態は、決して Jespersen 氏の所謂 *fester Anschluss* ではない。どちらかと言へば、*loser Anschluss* の方に近い。もつとも、*loser Anschluss* の場合には、息が一度弱まつて、然る後に再び強まるのであるが、臺灣の入聲の場合には、中心母音の終で息が一度弱まると、もはや再び強まること無く、弱まつたままで  $p, t, k$  の閉鎖が作られるのである。故に、韻尾  $p, t, k$  は殆ど聞えず、或は殆ど聲門閉鎖音かと聽き誤られる位である。 $p, t, k$  の閉鎖は、勿論ごく柔かに作られる。且、聲帯の振動は、 $p, t, k$  の閉鎖が作られて後に始めて止む (Karlgren: *Etudes sur la phonologie chinoise* 262頁)。故に、聽覺的效果から言へば、 $kip, kat, kok$  よりも、寧ろ  $kʰp, kaʰd, koʰg$  の方に近い。更に一層詳しく言ふならば、 $kʰp, kaʰd, koʰg$  のやうに記すべきであらう。つまり、「短促」と言つても、國語の促音などのやうに「急に止る」のではない。寧ろ、「急に

消える」といふ感じである。國語の促音の場合には、相當に強い息が、*p*, *t*, *k* の閉鎖によつて、と阻止される。然るに、臺灣の入聲の場合には、「阻止される」といふ気持は少しも無い。閉鎖の作られるに先立ち、呼氣は既にごく微弱になつてゐるので、*t*, *k* 相互の區別などは、餘程注意してゐないと聞きとれない位である。廣東方言ではこの *t*, *k* の代りに屢々聲門閉鎖音を用ゐる (Jones and Woo: *Cantonese Phonetic Reader* xi 頁) といふことであるが、さもあらうと思はれる。臺灣の發音でも、聲門閉鎖音に似て聞えるのは主に *t*, *k* 殊に *t* の場合である。但し、臺灣に於ても *t*, *k* の代りに實際に聲門閉鎖音を用ゐる場合があるのかどうか、その點は未だよく知らない。

吳方言の入聲韻尾については、趙元任氏は左のやうに言つてゐる。「入聲韻尾には、*p*, *t*, *k* の音は全く無い。入聲字を單讀する場合には、嘉興の入聲長讀法と温州の入聲の全部を除く外、一般には喉部の關閉作用<sup>?</sup>を伴つてゐる。但し、入聲が下の字に連つて行く場合には、<sup>?</sup>を用ゐず、ただ一種の短音となる。例へば、『六』は *loʔ* であるが、『六角』は、*loʔkoʔ* でもなく、日本の促音の如き *lokkoʔ* でもなく、*lokoʔ* であり、第一字はただ少し短く發音しさえすれば入聲に讀んだこととなるのである。」(『現代吳語的研究』68 頁よりの抄譯) 別稿「悉曇藏所傳の四聲について」の中に記した常州出身の人の發音も、これと大體は一致してゐる。但し、「一個」*iekoʔ* 「一百」*iepaʔ* 「阿到」*atoo* などのやうに陰入聲が *p*, *t*, *k* へ連つて行く場合、その *p*, *t*, *k* は屢々聲門の閉鎖を伴つて發音されるやうに感ぜられるのであるが、如何なものであらうか。併し、勿論、「客人」*k'aniŋ* 「作興」*taʔŋ* 「一道」*iodo* などのやうな場合には、聲門は決して閉鎖されない。又、一般に位置の如何を問はず、*sentence-stress* の弱い場合には、入聲音節は<sup>?</sup>無しに發音されることが多い。結局、談話の中では、入聲音節は<sup>?</sup>無しに發音されることの方が寧ろ多いわけである。

これらの状態から考へると、唐代の吐蕃人によつて *b*, *d*, *g* と寫されてゐる當時の北支那の入聲韻尾は、その實は寧ろ現代の臺灣音の形に近いものではなかつたらうか。この種の形から聲門閉鎖

音に移行することは、極めて容易である。而して、その聲門閉鎖音が更に弱まり、つひに消失して、その結果全く入聲の特色を失ふに至ることは、これ亦極めて自然なことである。

吐蕃人が *r* と寫したのも、恐らく、前記の *ŋ* のやうな形が更に弱まり、舌尖の接觸のごく柔かくなつた状態を表してゐるものではないかと思はれる。即ち、この *r* は、劉半農氏の言ふやうな摩擦性の音ではなくて、寧ろ、*on-glide* だけの *semi-rolled r* ではないかと想像される。勿論、これ亦「急に消える」といふ氣持でごく微弱に發音されたものに相違無い。さうして、これは結局、*ŋ* から<sup>?</sup>へ移つて行く中間状態を示してゐるものと考へられる。

なほ、朝鮮の漢字音では、舌内入聲の韻尾は、*ɿ* ではなくて *l* になつてゐる。思ふに、その支那に於ける原音は、やはり前節の *r* と類似の性質のものではなかつたらうか。(吐蕃人によつて寫されたのは、唐朝後半期の西北支那音であるが、近代の朝鮮漢字音の基礎となつたものは、別稿に證する通り、五代又は宋初頃の開封標準音である。) 但し、古代の諺解類に用ゐられた漢字音記法の一種の流儀に於ては、舌内入聲の韻尾を表すには、*r* 又は *l* を表す諺文 己 の右に、必ず、影母の記號 *ɿ* を添へてゐる。古代支那語に於ける影母の頭音は、Karlgren 氏等に據れば、聲門閉鎖音であつたといふ。古代の諺文で入聲韻尾の 己 の右に附記された *ɿ* は、單に入聲短促の勢を表す意味であつたらうか。それとも、支那或は朝鮮にかつて *r*, *l* の如き發音が實際存在したものであらうか。(己 の右に *ɿ* を附記した例は、固有の朝鮮語の中にも見出される。前田恭作氏著「龍歌故簡箋」16 頁參照。)

さて、北京官話に於て、「北」*pek* は *pei* となり、「百」*pak* は *pai* となり、「沒」*must* は *mei* となつてゐる。この類を見ると、あたかも入聲韻尾の *t* や *k* が母音化して *i* になつたかの如く見えるけれども、實はさうでない。何故なら、支那語の入聲に於ては、中心母音から *p*, *t*, *k* への移行は、英語の *dip*, *hat*, *cock* の場合などとは違つて、比較的緩かであり、従つて、その間の *glide* が顯著になつて來るといふことは、有り得べきことな

のである。朝鮮音の「百」pāk, 福州音の「百」p ik などを思ひ合すべきである。「百」は中原音韻では pai? の形であつた。つまり、まづ中心母音と k との間の glide が發展して i 音となり、然る後に k が ? に變じ、その後つひに消失し去つたのである。この例では、中心母音と k との間に i 音が發達してゐるけれども、中心母音の性質によつては、u 音の發達した場合もある。例へば「博」pak は福州音では pauk になつてゐる。北支那に於ても、pak は恐らくまづ pauk に變化し、これから中原音韻の形 pau? に移り、更に po?, po と變化して、現代の北京官話の形が出来たのである。(中原音韻に於ては、蕭豪韻の平聲陰の下に包・彪・苞を出して「巴毛切」とし、更に、同じ韻の入聲作平聲の下に薄・箔・泊・博を出してやはり「巴毛切」としてゐる。然るに、現代の北京官話では、前者は pau の音であり、後者は po の音である。然らば、同じ「巴毛切」でも、包の類と薄の類との間には、何らか區別が存したものと考へなければならぬ。中原音韻の起例中に曰く、「入聲派入平上去三聲者、以廣其押韻爲作詞而設耳。然呼吸言語之間、還有入聲之別。」と。思ふに、當時入聲は實際上未だ存在したのであらう。即ち、包の類が pau であつたのに対し、薄の類は pau? であつて、兩者の間には區別が存したものと考へられる。)

なほ、唐朝後半期の北支那に於ける入聲韻尾の状態を知るためには、かの吐蕃人の轉寫例と略時代を同じうする所の我が天台漢音がよい参考になる。俗慈弘氏編「天台宗聖典」中の「法華儀法」及び「例時作法」に就いて見ると、例へば

十萬億佛一しうばんにくふ  
 無量照十方國一ぶりやうせうしはうくゑき  
 成佛以來・於今十劫一せいふいらい・よきむしつけう  
 一心敬禮本師釋迦牟尼佛一いしんけいれいばんしせきやばちふ  
 佛告文殊師利・若菩薩摩訶薩云々一ふつかうぶんしゆしり・じやくほさつばかさ云々  
 若一日・若二日一じやくいちじつ・じやくじくじつ  
 此日已過一しじつちくわ

汝勿謂此鳥・實是罪報所生一じよぼつちしてう・しつしさいほうそせい

極樂國土一きらくくゑきと

白衆等聽說一はきしうとうていせつ

赤色赤光・白色白光一せきせきせつくわう・はいせきはいくわう

白鶻一はいかう

かやうなわけで、入聲韻尾は、フチツキクの明瞭な形で傳へられてゐるものも有るが、中には促音になつてゐるものもあり、又全く消失してゐる例も多い。十(しう・しつ・し)・佛(ふつ・ふ)・薩(さつ・さ)・白(はき・はい)などが、いろいろな形で現れてゐることに注意せよ。入聲韻尾の微弱化の中で、或者は恐らく我が國で傳誦される間に起つたものであらう。例へば、入聲韻尾の消失は大抵は句の内部でのみ起ることであるのに、舌内入聲の場合だけは、句の末尾でも盛に消失が起つてゐる。思ふに、舌内入聲の韻尾は、我が國に輸入されてから後も、abitarut (阿彌陀佛)・fosa (菩薩) の如く、セを以て發音されてゐたため、他の入聲の韻尾 -fu, -ki, -ku (及び舌内入聲の一部 -i) の場合よりは、一層消失し易かつたものであらう。併し、微弱化の或部分は、支那原音に於て既に起つてゐたものに相違無い。當時、入聲韻尾の三内の別は勿論假存したが、その響は餘程微弱なものであり、即ち、結局、大體に於てやはり現代の臺灣音に於ける状態に近いものではなかつたらうかと思はれる。

當時入聲韻尾の發音が微弱であつたことは、羅常培氏の引いてゐる吐蕃人の轉寫例の中に、「一」i「釋」pyl「亦」yi「釋」si のやうな例の存することから見ても想像される所である。唐末宋初頃、入聲韻尾が次第に弱まつて行く傾向に在つたことは事實であらう。但し、然らば入聲韻尾はかつてはごく明瞭な、國語の促音のやうな p, t, k であつたか、といふと、それは未だよく分らない。或は、最初から現代の臺灣音の形と大差無い位の微弱な音であつたかも知れない。

因みに、朝鮮語の chip (家) kot (處) mok (頸) などの p, t, k も、やはり ㄷ, ㄷ, ㄱ のやうな柔かい音であるが、臺灣音の入聲韻尾程に微弱ではない。但し、私の聽いたのは、大邱出身の人の發音である。(終)